二男・秀蔵を追放　第一次測量から第六次測量まで行動をともにした二男秀蔵は、内妻の法名「妙諦」に生ませた子であったが、忠敬と相性がよくなかった。第六次測量の途中でなにか問題を起こしたらしく、病気療養中という名目で帰国の途中、大坂から帰された。それ以後、測量には伴わず、留守居などさせられていたが、文化一二年（一八一五）にとうとう家を出されてしまった。

文化一二年四月二七日、伊豆七島測量に向かう隊員が出発した。尾形慶助、伊能七左衛門らが品川まで見送りに出た。秀蔵は忠敬の看病と留守居に残るようにといわれたが、近所まで送りたいと強いて出かけたが、直ぐに帰らず一同と品川まで送った。ほかの見送り人は七つ頃（四時）帰ったが、秀蔵はどこを歩いていたのか、夜九つ頃（夜中の一二時）帰宅し、忠敬に挨拶もなく直ぐに床にはいってしまった。

忠敬は、不埒であると激怒し、伊能七左衛門から秀蔵に、不埒であるから家を出て行けと申し渡させ、追い払った。二八日は雨だったので晦日に秀蔵は出ていった。忠敬は、これまでも度々教訓もしたが、謝り入りますとか、これから改めますという言葉は一言もなかったという。

ほかに人がおらず、忠敬は病臥しているので、看病するのはとうぜんなのだが、秀蔵の振る舞いに七左衛門も尾形慶助もあきれているという。おそらく禁を破って酒を飲み、酔って帰れないので深夜に帰ったらしい。追い払うと忠敬宅は誰もいなくなるが、悪者を追い払って安心した。佐原に行くことはないと思うが、もし行っても家には入れないようにという。

以上は一件落着して、文化一二年五月二日に佐原にいる娘の妙薫に認めた手紙の内容である。一四歳から測量につれて歩いた秀蔵は、二九歳のはずであるが、どうしてこのようなことになったのであろう。忠敬は作業中にヘマをやった隊員をよく叱ったという。やかまし屋だったのである。秀蔵は忠敬の仕事上の要求についてゆけず、怒られてばかりいる間に気持ちが全く離れてしまったのではないか。能力がもとも

と低い場合、叱ってもよくはならない。なにか別の、本人にふさわしい仕事を、与えることはできなかったのかと思うと残念である。

三日になると、測量を始めるとき大変お世話になった桑原隆朝の息子（父と同じに隆朝を名乗る）がわざわざ忠敬宅にやってくる。秀蔵は「（桑原宅を訪れて）大心得違いをして、不埒なことで一言もありません。なにとぞ桑原方においていただきたい」と願ったとのことである。

桑原は「亀島先生（忠敬のこと）から依頼があれば、なんとかしましょうと返事をしましたが、どうしますか」と忠敬に問う。

忠敬は秀蔵のことは、お頼みは致しません。世話をするかしないは、桑原さんの判断にお任せしますと答える。秀蔵はしばらく桑原の厄介になろうと詫びを入れたらしいが、事情を詳しく知らない桑原は、忠敬に問い合わせるしかないだろう。忠敬は、はっきり思っていることを述べる。そうなると桑原も面倒をみることはできないだろう。

そのあと忠敬は再び妙薫に手紙を出して「（秀蔵は）二七日には禁を破って酒を飲んで、日中に帰ることができずに夜中に帰ったのです。そして、そしらぬ顔で、（桑原に）詫びを入れたものと推察します。実に言語道断の悪者です。秀蔵を追い払うと無人で不自由ですが、追い払ったことにより私の病気も治り、寿命も延びるでしょう」と書き送る。

えらい嫌われ方である。これでは一緒にはいられない。秀蔵は実子でありながら、第一次測量のときから内弟子として扱われた。四国測量のとき、地元側は実子と聞いて、ほかの内弟子と少し待遇面の差をつけようとしたが忠敬は好まなかった。

忠敬は有能な若者は大好きで、養子先を探したりして面倒をみているが、いま一つの者には評価がきび

しかった。秀蔵には気の毒なことであった。大谷亮吉によると秀蔵は文筆、算数に長じたが短慮粗暴であったという。文化七、八年（一八一〇、一一）の頃、江戸で桜井氏の婿になったが、義父母と折り合いが悪く離縁となって、忠敬のもとに戻っている。このあたりは人格的な問題も確かにあった。

そして冒頭のような話につながってゆく。追放の後は、数年各所を流寓して、忠敬の死後の文政七年に佐原に戻り、父の旧姓の神保（じんぼ）と改姓し、玄二郎（げんじろう）と名乗って村童に読書、算術を教えて糊口（ここう）に資し、天保九年（一八三八）五三歳で没した。墓は門弟の手により観福寺（佐原市）の伊能三郎右衛門家墓地近くに建てられている。